講義クローズアップ

東京カレッジ長
羽田 正
Masashi HANEDA

1953年大阪市生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。パリ第3大学で博士号取得。東京大学東洋文化研究所教授、同所長、東京大学理事・副学長を経て、2019年より東京カレッジ長。世界史が専門で、主な研究活動は、前近代 - 近代における環インド洋・環シナ海世界の港町における異文化交流の諸相研究、グローバルヒストリーの方法論研究などで、現在は新しい世界史の具体的な叙述方法の開発に取り組んでいる。学外では、安倍首相による戦後70年談話作成のための材料を提供する21世紀構想懇談会の委員を務めた。

「地球の住民」の立場で新しい世界史を描く

100年間培われた学問の枠組み・方法・価値を問い直す。イラン史の研究者だった羽田正先生はなぜグローバルヒストリーを専門にする決意をしたのか。「今」という時代を相対化し、柔軟な視線で未来を展望するためのヒントがそこにあります。

伝記を読むのが好きだった子供時代

—羽田先生はどのような子供時代を送られていたのですか?

子供時代は本を読むのが好きでした。小学校高学年から、中学・高校初めぐらいまで、片っ端からたくさん読みました。硬い本ばかりではなくて、ときには「少年マガジン」などのマンガも読みました。『横綱若乃花』というマンガは繰り返し何度も読んで、今でもそのストーリー展開を覚えています。当時、日本や世界の文学全集を揃える一般家庭が多くあり、私の家にも月に1回、分厚い本が届きました。それをとにかく頭から終わりまで全部読む。山岡荘八の長編『徳川家康』も面白く読んだ記憶があります。起伏のある人生、つまり人の一生を書いたものを読むのが好きでしたね。いわゆる伝記です。

1960年代末頃大学紛争の波が高校にも押し寄せてきました。私が高1のときには過激派の生徒によって学校の建物が封鎖されてしまいました。当時の私は本を読むのが好きなだけのおとなしい生徒で、現実社会のことは何も分かっていませんでした。だから、この人たちは一体何をやっているのだろうと思っただけで、活動に加わることはありませんでした。高校時代は、今思い出しても、燃えないというか、鬱々としていた感がありますね。

私が京都大学に入ったのは1972年ですが、そこも凄まじい有様でした。初めての授業に行ってみたら赤ヘル覆面が入ってきて演説をはじめ、やってきた先生は何も言わずに帰ってしまいました。こんな調子で、高校から大学の2年ぐらいは、まともに授業を受ける環境にありませんでした。

歴史の本を読むのが好きで、歴史を勉強するつもりで文学部に入ったのですが、大学紛争でろくに授業もない。だから、大学に入学したときは、大学に残ろうとは思いませんでした。卒業してすぐに就職するほうがよいと思ったのです。でも、2年生になって初めて受けたいくつかの専門的な授業が結構面白くて、それ以後は大学に馴染んで真面目に学業に取り組みました。卒業論文は、英語やフランス語以外に、ペルシャ語、アラビア語、ロシア語など、いろいろな言葉の文献を読んで書いたのですよ。どれも3年生になってから勉強した言語です。私の所属した西南アジア史学科では、こんなにやるのか、と思うくらい言葉ばかり学習させられました。多くの言葉を学び論文も書いたのに、そこでやめて社会に出てしまうのももったいないと思い、大学院を受験しました。そして、気がついたら学者になっていた(笑)。

「イスラーム世界」に魅せられた学生時代とイラン革命

—どのようなきっかけで西南アジア史に進まれたのですか?

なぜかと言われると困るのですが、その頃の私は特に中央

アジアの古い時代、いわゆるシルクロードの時代に関心を持っていました。意識していませんでしたが、東洋史学者だった祖父（羽田亨）や伯父（羽田明）の影響があったのかもしれません。当時の京大では、中央アジアの歴史を学ぶには、中国を中心とした東洋史か、西アジアを中心にした西南アジア史か、どちらかの学科を選ばなければなりませんでした。西南アジア史を選んだのは、東洋史で必須の漢文があまり好きではなかったことに加えて、皆が初めて西アジアの言語を学ぶので、スタートで差がつかないと伯父にアドバイスされたことにもよります。

ところが、西南アジア史に入ってみると、中央アジアの古い時代を研究するには、ソグド語など今はもう使われていない言葉を学ばねばならないということが分かりました。当時の日本にはそんな言語を教えてくれる人は誰もいません。世界でも数人しかできる人がおらず、そこへ行って学ぶしかないと言われ、これはちょっと無理だなと思いました（笑）。一方、ペルシャ語など西アジアの言語はカリキュラム上必ず学ばねばならなかったので、そちらに集中しているうちに、中央アジアからむしろ西アジアの歴史に関心が移っていきました。

作られた「イスラーム世界」とグローバルヒストリー

―平坦な道のりではなかったのですね。ですが研究を続けたいという思いは一貫されているように思います。

真っ直ぐな道とは違い、あっちへ行きこっちへ行き、でした。でも確かに研究をすることには迷いはなかったですね。面白いからこれを続けよう、と思っていました。先生に恵まれたと思うし、時代の雰囲気でしょうか、私の周辺には、海外留学によって道を究めようとする人たちが集まっていました。

パリで書いたフランス語の博士論文は16-17世紀イランの政治制度史に関するものです。イスラーム教が定着した後の「イスラーム世界」におけるイラン史の研究です。今から考えると、その頃は「イスラーム世界」という概念を初めからそこにあるものとして当然視していました。

日本に戻った後、最初に赴任した大学や東大に来てからの学部、非常勤の大学での授業では、イスラーム教と「イスラーム世界」の特徴を説明し学生たちの誤解を解くような話をしていました。今でもそうですが、イスラーム教というと、理解しにくい、怖い、厳しい、などネガティブな印象を持つ人が多い。しかし、私は幸い東大に来てから何度も中東や北アフリカを訪れる機会に恵まれ、現地の人々は本当に明るく親切で、美しい建物や工芸品が多く、文化の程度が高いことを知りました。そこで、「イスラーム世界の歴史」という授業では、一種の伝道師として、イスラーム教は怖くない、ムスリムはこんなに美しいものをいっぱい作ってきたのだと話し、学生の認識をあらためてもらうべく努力していたのです。

しかし2001年に9.11同時多発テロが起き、英語圏だけでなく日本でも凄まじいイスラームバッシングが起きました。「伝道師」の私は全く無力でした。そしてまさにそのとき、なぜイスラーム教やムスリムだけが異質な別のものとして括られ語られるのだろう、という根本的な疑問を持ったのです。実際に訪れてみると、私たちと多くの価値を共有する人々が住んでいる。それなのに、そこは全く異なる「イスラーム世界」の一部だと捉えられます。「イスラーム世界」独自の特徴やそのヨーロッパや日本との違いばかりが強調される。「厳格な一神教」や「豚肉を食べてはいけない」などはその例です。「イスラーム世界」は自分たちの住む空間とは異なった特徴と歴史を持ち、そこに住む人々は異なる価値観を有しているということが無条件の前提なのです。

世界の中でイスラーム教やムスリムに与えられる空間と役割はあらかじめ決まっているので、いくらよい点を「伝道」しても、全体の中に置くとこれらはマイナスにしか見えないのです。そのような世界の見方自体がおかしいのではないかと思い、「イスラーム世界」という概念の起源を調べてみました。その結果を記したのが2005年に出版した『イスラーム世界の創造』*1という本です。この中で、この概念は近代ヨーロッパによって創造されたもので、正負いずれにせよバイアスがかかっているということを論じました。この本を書いてから、共通性や繋がり、連関性などをもっと意識した研究を心がけるようになりました。歴史研究で言えば、グローバルヒストリーです。

―それ以前は、イスラーム世界の特徴や違いを強調する方法で分析されていたのですね。

そういうことです。その方法に全く疑いを持たなかったのです。初めから「イスラーム世界」が存在すると思っていて、それが作られたものであることに気づかなかったのです。だから、2001年より前に出した私の研究は、全部使い物になりません、と宣言しました（笑）。

―文系の学問全体がそういうふうに転換したわけではなくて、これは先生オリジナルの転換ですか?

同じように考える研究者も増えてきましたが、まだ主流ではありません。19世紀後半や20世紀初めにできた学問の枠組みや方法、価値が100年を超えて強固な伝統になっています。従来の枠組みの中でも研究できるテーマは多くあるので、根本的な問題に気づかないのです。しかし、100年前の世界を理解するときに有効だった枠組みをそのまま用いて研究しても、現代世界が分かるはずがありません。

―羽田先生は歴史を見る新しい枠組みとして「グローバルヒストリー」に取り組まれています。

グローバルヒストリーに取り組むようになった理由がもう一つあります。それはナショナルヒストリーの限界という問題と関係します。1990年代にイランで道を歩いていると、よく現地の人に「何をしに来たのか?」「職業は?」と聞かれました。イラン史の研究者だ、というと多くの人はとても喜び、イランの歴史の話をあれこれ語ります。しかし、資料を読んでいる私からするとおかしな解釈が多いので、そのように言うと、「あなたは外国人だからね。まだイランの

*1 羽田正『イスラーム世界の創造』（東京大学出版会、2005年）。2021年には『〈イスラーム世界〉とは何か「新しい世界史」を描く』にタイトルを変え講談社学術文庫から文庫版が刊行された。

歴史をよく分かっていないよ」と返されることがしばしばでした。イランにはイランのナショナルヒストリーがあり、イラン人が正しいと信じる歴史があるのです。一方、当時の国際イラン学会のような場では、参加者の多くがアメリカやヨーロッパの人でイラン人はあまりいません。国際的ではあるけれど、こちらはこちらで完全に閉じた中で、外からイランを見ていろいろ議論しているのです。

そのギャップというのかな、ある種の分断に気づき、イランの歴史にどのようにアプローチすればよいのか分からなくなったところで、グローバルヒストリーという手法に出会いました。グローバルヒストリーは、地球を一つの叙述や理解の枠組みとします。となると、イランも日本もその一部でしかありません。お互いに同じ地球の住民なのだから、「イランの歴史を地球の歴史の一部として私が論じるのも、あなたが語るのも、両方ありですよね」と言える。グローバルヒストリーは立場や視点が違っても誰でもそこに参入できるし、意見交換ができるのです。しかも、これから新しい歴史解釈を作っていける。それが魅力だと感じました。

—グローバルヒストリーと各国の歴史との関係をどのように考えるとよいでしょうか?

歴史学では一つの国を単位にしてその過去を考えるのが一般的ですが、現実には、過去のある国の動向はその中だけでは完結しません。従来は、外との複雑な関係があるのに、それをカットする形で時系列に従っていわば一本の「筒」を作って歴史を解釈し、それをナショナルヒストリーとして理解してきました。また、このような筒をいくつも束ねて紐で縛ったものを世界史だと考えてきました。この歴史の捉え方は、国民の形成、すなわち、ナショナルアイデンティティを強化するという点で大きな意味がありましたが、逆に、「ナショナル」ではない他者に対してバリアを築いてしまう欠点がありました。私のイラン史についての体験もその一例です。縦の筒だけに満足するのではなくそれらを横に繋ぐような過去の捉え方、あるいは、ある時期の世界全体を視野に入れてその過去を理解する、こういった視点が必要です。今現在の世界で起きていることは、世界全体を視野に入れないと理解できません。ですから過去もそのようにして見るべきだと思うのです。縦の歴史と横の歴史の両方が必要なのです。

ただし、横に見る、繋ぐのは難しい作業です。歴史学者は、基本的に過去に記された文献を使って過去を解釈しますが、いくら優秀な学者でも様々な言語の資料をすべて読むことは不可能です。歴史を横に繋ぐためにはどうしても共同研究が必要になります。

—歴史学の共同研究というのは新鮮ですね。

Global History Collaborativeという国際共同研究を行って来ました。アメリカ、ドイツ、フランスの歴史学者と東大の私たちでネットワークを作りました。ただ、これをアフリカやラテンアメリカなどに広げることに苦労しています。植民地化された地域の人たちの歴史についての考え方は、かつての「帝国」の後継国家の研究者たちのそれとは相当違います。お互いの意図を理解し信頼関係を構築するためには相当な時間と労力がかかります。また、意見や情報交換の言語が英語でよいのかという問題もあります。

ウクライナ問題をどう捉えるか

—グローバルヒストリーの視点に立つとウクライナ問題はどのように映るのでしょうか?

1900年頃にはウクライナという国はありませんでした。あのあたり一帯はロシアの領域でした。ロシアは、モスクワやサンクトペテルブルグを中心に、時とともに次第に領土を拡大しています。海外に出ていくのではなく地続きに膨張するという点で形態は異なりますが、これは当時のイギリスやフランスと同様の植民地帝国の形成と見ることができます。その点では清朝の中国も同じです。このような多様な人たちが住む「膨張帝国」にナショナリズムが持ち込まれ独立への動きが生じると、それに対抗して帝国全体にタガをはめる有効な論理が見つからず、それも一つの原因となってロシア帝国は滅びました。

しかし、その領域の大部分はボリシェヴィキによって引き継がれ、それまでになかった共産主義という新しい枠組みによって、多様な人々の住む領域全体を一つにまとめることに成功します。中国でも、清朝が滅んだ後の混乱を経て、共産主義を統合の原理として中華人民共和国が成立しました。多様な人々をそのまま組み込んで新しい国の形ができたのです。これはロシアと中国に共通する特徴です。同じ「膨張帝国」だったオスマン帝国やオーストリア・ハプスブルク帝国は滅びその領域がバラバラになったのに、ロシアや中国が同じ道をたどらなかったのは、共産主義という新しいイデオロギーの力が大きかったのです。

一方、ロシア革命の時期に独立運動が起きたウクライナでは、形式的にウクライナ共和国が成立しますが、その領域はソ連の一部となります。それから70年が経って共産主義がもたなくなりソ連が崩壊してはじめて、完全な主権を持った現在のウクライナが独立します。

プーチンはロシア帝国時代の領土が本来のロシアなのだ、と考えているように見えます。海外に植民地を持った国家の場合は、本国と植民地の区別がはっきり目に見え理解しやすいのですが、

周辺に領土を拡張していった膨張帝国の場合は、どこまでを本国とするのか線引きが難しいところがあります。その意味では、プーチンの「ウクライナはロシアの一部だ」という議論は、ロシアの中では一定程度は通じるのでしょう。しかしソ連が崩壊したときに独立国家として認めた主権国家のことを、後になって自らの一部だと主張するのは、全くナンセンスだし、ありえないと思います。

中国はこの問題に非常にセンシティブなはずです。新疆、モンゴル、チベットなどは、清朝の時代にひとつの枠の中に入った領域です。今、その枠組みにタガをはめることができるのは、中国共産党だけです。中国にとって、ウクライナの戦争は他人事ではありません。

―国の維持の仕方や政治体制は地域ごとに多様な形があるのですね。

日本は明治以降フランスやドイツなどヨーロッパの国々とよく似た政治社会構造を作ることに成功し、それゆえに社会は比較的安定しています。これは私たちが誇るべきことです。ただし、政治社会構造はこれしかない、他の国も自分たちと同じでなければならないと考えるなら、それは間違いです。人々の関係の取り結び方はきわめて多様です。世界各地にはそれぞれの環境に適し歴史的文脈に則した政治や社会の体制があるはずで、それを認めることが必要だと思います。今の国連は、基本的に主権国民国家の存在を前提とした集合体です。しかし、「主権」にせよ「国民国家」にせよ、それらはあくまでも歴史的に形成されたものでしかありません。これらが長く続く価値となるかどうかは、現在この体制を採用している国々の行動にかかっているように思います。DiversityやInclusionを強調するなら、主権国民国家という体制を作りにくい人間集団とどのようにつきあっていくのか、彼らの政治の仕組みをも尊重した国際連携はどうあるべきかを真剣に考えてゆくべきではないでしょうか。

国としての日本のあり方を当然視するのが、大方の日本人の強みであり弱みでもあります。世界各地の国の成り立ちには多様な歴史的文脈があるし、同じ国の中にも様々な生活の積み重ねがあります。ある領域の中に住む人々は一体の国民だという考え方が必ずしも簡単には成り立たないのだ、ということを分かっておく必要があると思います。だとするなら、原則として国ごとの歴史を並べる今の世界史教育の構図と説明はこれでいいのだろうかと思うのです。

―多様な文脈という意味では、先日、羽田先生が率いる東京カレッジで、ウクライナについて複数の国の視点で考えるという企画が行われました。

日本のメディアの多くは、アメリカとヨーロッパの見方を伝えるだけです。それ以外の地域の人々が何を考えているのかはほとんど分かりません。しかし、国連のロシア非難決議では50程度の国が賛成していませんし、経済制裁に参加している国は欧米諸国とそれにつながりの深い日本・韓国・オーストラリア程度で数は限られます。報道による限り「ロシアが悪い」のは自明なのに、一体なぜなのだろう。欧米以外の地域の人々の意見も知りたい、と思ったのです。そこで、ロシアの侵攻がどのように報じられ、政治家や人々がこの問題をどのように捉えているかについて、欧米以外の6地域の専門家にインタビューを行いました。インタビューを聞き、自分でも少し調べてみて、今回の問題が単純に善と悪、正と負という構図で捉えられてはいないことがはっきりしました。実は、冷戦のときもそうでした。東側対西側としばしば言われますが、それ以外に西でも東でもない国がたくさんあったのです。インタビューの動画は、東京カレッジのYouTubeチャンネル*2で公開していますので是非ご覧ください。

―最後に、社会人は歴史とどのように関わるべきでしょうか?

難しい問いですね。歴史はただ昔のことを知り覚えることだと思っている人が多いのですが、実際は、現代を理解するためのものだと思うのです。今という時代を相対化することが大事です。政治・経済や社会の仕組み、重視される価値は決して不変ではありません。過去から人類が歩んできた道の多様さを知れば、現代が絶対ではないこと、未来の創造も可能だということが分かるでしょう。これが歴史の効用です。様々な見方を知りそれらを自分の中に吸収しながら現代を自分なりに理解し、未来を展望する。歴史はそのためのツールだと思います。特に社会人にとって、現代を柔軟に見るために、とてもいい材料だと思います。

（11期：坂下鈴鹿、18期：関本邦夫、24期：古谷博行）

*2 東京カレッジYoutubeチャンネル「ウクライナ危機を見る複数の目」(https://www.youtube.com/c/TokyoCollege/videos)

編集部からのおすすめ （24期：古谷博行）

●羽田正
『グローバル化と世界史（シリーズ・グローバルヒストリー）』
（東京大学出版会、2018年）

なぜ今グローバルヒストリーが必要なのか。現代だからこそ果たせる人文学の役割とは。グローバルヒストリーの観点で世界の歴史を捉え直すとどのような視界が開けるのか。羽田先生の構想に迫ることができる1冊です。

●羽田正監修
『角川まんが学習シリーズ 世界の歴史』
（KADOKAWA、2021年）

羽田先生の有言実行。グローバルヒストリーの実践です。第20巻は特におすすめ。1990年以降の世界の出来事とこれからの世界の展望が一人の主人公の目を通して語られます。修了生のみなさんの人生経験とも重なる部分が多くて目頭が熱くなるかも。もう一度世界史を学び直しませんか?